説教要旨「十字架を背負って歩もう」

使徒言行録７章５４～８章３節

最高法院の被告人席でステファノが語った言葉。そこでステファノは、神殿のあり方、しいてはそこに居並んでいるユダヤ教の指導者たちのことを、面と向かって批判しました。これを聞いた議員たちは激しく怒りましたが、ステファノに飛びかかりたいのを歯ぎしりをしてこらえました。しかし彼らの理性を吹き飛ばす一言をステファノは発します。「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」（使徒 7:56）と。

ルカによる福音書２２章で、捕らえられたイエス様は「今から後、人の子は全能の神の右に座る」（ルカ 22:69）と言われていました。ステファノはこのイエス様の言葉が実現したことを告げたのです。自分たちの過ちを受け入れられない議員たちは、ステファノを引きずり出して石を投げつけて処刑しました。死の間際、ステファノが語った最後の言葉は、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」というものでしたが、これもルカ福音書２３章に記された、イエス様の十字架上での最後の言葉と重なります。

「苦しいときの神頼み」と言いますが、苦しみにあうことで神への不信の思いに捕らわれ、神への信仰を失うような、「苦しいときの神離れ」が、わたしたちの姿ではないでしょうか。家庭に不幸が起こる、思いがけない災難にあう、思い通りに事が運ばない。そういったことでわたしたちは簡単に神への信仰をなくしてしまうのです。そこでわたしたちは、「本当に神が共におられるのなら、どうして助けてくれないのか」などと神を疑い、不平をいってしまいます。しかし、そのようなわたしたちに、ステファノの最後は、イエス・キリストの十字架を指し示すのです。

病に苦しむ人を癒やし、孤独な人と一緒に食事をし、権力者におもねらず、弱く苦しんでいる人を優先し、弟子たち一人一人の足をご自分の手で洗われたその生き様を。そして、人々に裏切られ、弟子たちにも逃げられ、にもかかわらず、十字架を自らの使命として受け入れて、孤独に、惨めに十字架にかけられながらも、相手の許しを祈るその死に様を。

（２０２１・１０・１７　説教者：稲垣真実）